雜事記

十二

漫録

内閣文庫

和書	
類	三四五四三
號	
冊	三九
函	三三六
架	一一

内閣文庫

和書	
類	三四五四三
號	
冊	三九
函	二二三
架	四

内閣文庫

番號	和	34543
冊數	39	(12)
函號	213	32

第一

国立公文書館
National Archives of Japan

はしらこけし　我ひのりて長岡侍従をとし光秀の姻戚なる米
次平の義をのよまれ里正敦もその中より数まゝれて切心のたゝ
まゝなる水の流まいまあるゝもの〻涙行のよくれといふ面るしき
多〻仏世よりもゝ仏面なる称も念していたゝ亦そ
おもしろきとゝいさゝかものり書つ春秋の菓子花れ
えられしむす場のりこゝにまゝ砂敷ゝしたるいと清
かるる水の底にもき出つ玉藻なして四方よりまゝ小さま
まるこめるゝ小鯛かの涙となす事り歌
風よる花ゝのゝ思ゝ志ゝ浪乃ゝ小紅あ面ゝ淡の面もか
春そ孝門打しゝ毛橋ゝとくちり卯の花ハまゝしゝ秋るかゝ

雪水のかれもてのあまり咲つゝきる藤長岡伯侯

大君のめぐみも深きむさし野みそのゝ雪の

うれのかほるく　古河侍従

かゝりなるたくひも夏のかけそへくみとりて水よ

うなるむらさき　正敦

夏ハまゝ清水のかゝりもてこの雪かりぬる

なるのされる

ゆ、ゝ瀬ゝ流やみ池のかゝりもかゝ紀清くそへ

き姿としもなしほのかに西を見中られそうたるの

横雲流の落くるゝしにいとゝもむらさきまさる侍従

大君のめぐみの数ハたとへても岩根よりなる

流の末ゝも海さ敷もまゝ

新うたを木くの緑成たてぬきよりをもをれ

る流乃末ゝ糸つゝ打成のうれを地を心とりよ姫とよ

たさのうやもなり

音まさくとゝはの流もこさらこれも君ゝ細の名

まゝをなりゝ多敷ゝ多載の芳かゝ人てを親よう人ゝ

ゝ

芳木まそうゝ小恵のつ申ゝ紀いろよゝろを

おゝ見てゝ花ゝ見れ

あまの川日の光よりつゝ深もみち葉のちぶるよ
そあむ秋そまゝ深くなりゆくあきのもゝしぐるゝれも心
深とりゝ小額かゝれしる茶室なりさくよむうゝ小坂
政頃のたくゝしとかゝ石竹の垣松乃もゝらのおろそか
るるよきけむす石水もゝらせゝさゝちとう紀世の
外のさゝ沈を

藝の世よ湯ゝ無水のゝるもとゝむへゝ心とゝの
栖るるゝしゝいつまゝゝ不見めつるうちもやくれかゝ里ぬれ
も有ゝかゝしゝさまり紀世へあけつゝ紀の人ゝ行つれ
て海ゝてむとするよゝ紀かゝ里みちまゝ

すかの根の長ゝ紀ゝふゝるゝ川の日のゝやくも
りゝふゝ多ゝれんとすゝん

文化ゝ川のゝとゝ卯月ゝかゝの御室よ拾ひし
人ゝ長岡侍従古河侍従さゝ心侍従岩城侍
従能登ゝ無ゝ中ゝ後河ゝ家長兵部ゝ俗ゝ紀
朔備中ゝ高久大膳亮幸完ゝ人ゝ中ゝ兵法
ゝ紀ゝ

大酒の侍従分まゝかゝ重ゝ川紀ゝかゝ重ゝむ歌ゝ反ゝ

横井ゝ紀朝臣正敦